



長崎県のイチゴは、栽培面積が268ha(2017年)と全国5位の産地で、本県の施設園芸ではトップ品目です。近年は、大粒で多収、良食味品種である「ゆめのか」の導入が進

イチゴ「ゆめのか」 収穫の平準化に向け 株間と芽数違い検討

み、農家所得の向上が図られており、センターでは「ゆめのか」の増収技術や収穫の平準化技術の開発に取り組んでいます。「ゆめのか」は多収ですが、

「ゆめのか」の主要な作型であり、センターでは「ゆめのか」の増収技術や収穫の平準化技術の開発に取り組んでいます。「ゆめのか」は多収ですが、

試験の結果、クリスマス需要期にあたる年内収量は芽数制限にかかわらず株間が狭い(栽植株数が多い)方が多くなりました。一方で、株間25cmで芽数を1芽に制限すると、第2花房の収穫が早まり、比較的高単価で取引される2月までの早期収量が増加しました。さらに、3月下旬~4月上旬の収穫ピーク時に収量が減少し、収穫の平準化が可能となりました(図)。株間25cmで年内1芽制限する栽培方法は、特に栽培面積が30ha以上の比較的規模が大きい農家の労力軽減に有効な栽培方法だと考えられます。

「ゆめのか」を導入して長崎県のイチゴは着実に収量が増加してきています。本技術はさらなる定時・定量・定質出荷に寄与できるものと思われま

(長崎県農林技術開発センター 農産園芸研究部門野菜研究室主任 前田 衡)

1、2月に収穫の谷間が生じやすい面があり、谷間が生じると3、4月に大きな収穫のピークを迎えるため、収穫の平準化が必要とされています。

長崎県型高設栽培で